

II ま と め

本部会での5つの発表は、観点・アプローチはそれぞれ異なるにしても、道徳判断に関する研究という点では共通性があった。

まず、内藤(311)の研究は、道徳判断における動機の考慮は、保存の獲得と相関をもつことを示すとともに、細分化された認知機能を単位とする研究との関連を明確にしようとするものである。

つぎに古畑、向井、発智ら(312~4)の一連の共同研究は、今回は、いくつかの基準での親-子の道徳判断の一致・不一致の検討、子どもの道徳判断と、自己のみた友人・母親のそれとの関連の吟味を試み、また地域の特性との関係に言及したものである。

最後に、明田(315)は、児童の道徳判断の変化に及

ぼすロールプレイングおよびその聴取の効果を実験的に示そうとし、またその変化のPiagetとの関係での吟味を行った。

討論の中で沢田・津留らによっても指摘されたように、道徳性の研究は、道徳的基準の内面化、その発達的变化の意味、意図的な後天的経験の役割、社会技法との関連、人格構造との関連など、きわめて重要な問題が多い。

今回の研究は、いずれもごく限定された範囲での、瑞著についたものばかりである。しかし、こうした問題への、観点・立場・アプローチを明確にしての組織的考究は、今後大いに推進されるべき課題といつてよいのであろう。

(古畑和孝・明田芳久)

人 格 (316~324)

座長 西 平 直 喜・藤 原 哲

- 316 青年前期における性意識と自己像
 一 性認知態度と自己像間差異との関連 —
 国立特殊教育総合研究所 高 橋 美津子
- 317 少女において否定的な自己像の持つ意味
 一 症例を通じての一検討 —
 京都大学 菅 佐和子
- 318 对人的認知構造の研究
 一 青年における自己概念の変化(その1) —
 埼玉大学 藤 原 哲
- 319 青年期における自己意識の構造 (2)
 一 自己の独立性・依存性についての検討 —
 東京教育大学 加 藤 隆 勝
- 320 青年期の自己概念に関する研究 (1)
 一手記の分析による試み —
 山梨大学 山 田 良 一
- 321 文章完成法による自己概念の分析 II
 一 中学生の場合 —
 慶応義塾大学 杉 浦 喜久代
- 322 青年心理学に伝記分析的手法を導入する試み
 一 その2. 比較伝記的・類型的手法 —
 山梨大学 西 平 直 喜
- 323 (発表取消)
- 324 教師の自己評定における回答の歪曲
 愛知教育大学 ○鈴木 真 雄
 ” 岩 井 勇 児

I 発表と討論の経過

最初の4つの発表(316~319)は、青年期における自己概念を対象とするものであった。高橋(316)は、自己像と性意識との関係を問題とした。本報告に対して、林(琉球大)から、性意識の発達において、社会的文化的要因を考慮する必要がないか、岩井(愛教大)から、性意識と自己像との包摂関係はどうか、という質問が出された。発表者より、被験者は一定の地域の者に限定しており、社会的要因との関係は今後の問題としたい。又、包摂関係に関連して、研究目的を理論的に導いたということではなく、臨床場面で、性意識特に性別意識の行動への役割が大であるところから、研究目的を設定したとの回答があった。

菅(317)は、神経性食思不振症の少女(14才)を例として、否定的な自己像が、対他者関係とどのようにかかわっているかを明らかにしようとした。本報告に対しては、否定的自己像が神経性食思不振症に乾化する理由(加藤、東教大)、家庭環境の特徴(藤原、東学大)に関する質問が出され、発表者から、クライアントの両親の実態、少女の認知した両親像について紹介があり、食思不振症の原因に関しては、現在分からないとの回答があった。これに関係して、自己像を、肯定・否定という単純な次元でとらえるのではなく、否定性の意味を明確にする必要があるという意見(村瀬、国立精神衛生研究所)が提案された。

藤原(318)は、青年期において、意図的に自己概念を変化させる場合、どの側面において強い抵抗を感じるのかを明らかにするために、構成概念関係強度と自己概念の変化に対する抵抗との関係を分析の対象とした。本報告に対しては、構成概念関係強度の意味(岩井, 愛教大)に関する質問があり、発表者から、それは、事象の位置を決定される個人に内在する諸構成概念間の機能的独立性の程度を表現する旨の回答があった。更に、複雑な統計的操作と同時に、面接法を導入する必要があるのではないかという意見(藤原, 東学大)も提起された。

加藤(319)は、青年期の自己意識の中で、今回は特に独立性・依存性の特質とその発達の傾向を検討した。本報告には、青年期の自己意識に関して、なぜ自己批判(受容)、開放性(閉鎖性)、独立性(依存性)を取り上げるのか、又自己批判と自己受容などは、単純な一直線の両極であるのか(質問者不明)という質問が出されたが、発表者から、従来青年期の特質としてあげられているものを対象とし、同一被験者に如上のテストを実施し、3測度間の関係を検討する意図である旨、又、各次元は、単純に一直線ではなく、質的に異なったものを含んだ複雑なものだとは思いますが、現在のところは、一直線だと仮定しているとの回答があった。更に手続上の問題で、順位尺度を間隔尺度として扱った点、自分を、他の者と同格として、テストを構成している点は疑問だとする指摘(岩井, 愛教大)もあった。

なお、上記4発表に関しては、時間の関係上討論希望事項に言及されなかったが残念であった。又、方法・手続上の事に、多くの時間が費されたが、青年期研究では、特にテーマの意義・有効性の検討が、重視される必要があるのではないかと感じた。

(藤原 哲)

320 山田は、手記の分析を通して、青年期の自己概念を研究しようとし、その方法論的な吟味を行い、暫定的な結論として、自己概念の構造・様態・自己変革への志向性・自己概念のユニークさなどのカテゴリーを示した。これに対し藤原(東学大)から、記名一無記名、自我と自己とのかわり、肯定的自己と否定的自己の問題が、岩井(愛知教育大)から直観で典型をあげるやり方や、研究者の価値観について、村瀬(国立精神衛生研)から、同じく研究者の直観か価値観をどう内部チェックしているかなどの質問があった。

次の321 杉浦は、中学生期の自己概念の分析を、文章完成法によって追求した。「うちの中では私は」・「一

番自まんに思っているのは」ほか40項目によって資料を蒐集し、これを自己を高く評価したもの・普通・低く評価したものそれぞれに、2, 1, 0の評点を与え、self-esteem得点を出した。このSCTとソシオメトリーと自己評価の相関を算出しSCTと自己評価の間に相関の高いことをみとめ、self-esteem点の妥当性を示そうとした。これに対し、藤原(東学大)からself-esteemの得点化に対する疑問が出され、青年期の自己概念研究において、研究対象をidentityできずに数量的に分析することの限界を考慮してほしいという要望が述べられた。

次に322 西平は青年心理学に伝記分析を導入する方法を報告、その第2報として、比較伝記的として、橋本左内と福沢諭吉・福沢諭吉と内村鑑三の2組について、比較検討した。前者は、同一世代関連性を生きた2人が歴史的アイデンティティを異にしたために、全く異なった人生の軌跡を生き、後者の2人は、両親の生育環境の相異から、super-egoの在り方を異にし、人生において安定・柔軟・順応性の精神的健康型と、不安定・硬さ・不適応の精神的不健康型の生き方をとったことを述べた。これに対し、岩井(愛知教育大)から、橋本と福沢の比較文章が書かれた年齢が違うという批判、エリートの伝記と庶民青年の心理との関連をどうつけるか、伝記表現の限界に対してどう思うかと質問が出され、本田(実践女子大)から、青年期歴史的アイデンティティの具体例を更に示せという要望があり、村瀬(国立精神衛生研)から、福沢の“identity-free”という表現の微妙なニュアンス、歴史の先取りということをこのように表現してよいかという疑問などが出された。

最後の324 鈴木は、教師の行動・人格・教授法などを、「技術がすぐれている」・「えこひいきする」・「遊び相手になる」・「よくほめる」・「父兄とつきあう」など25項目からなるバッテリーで自己評定を求めた。

(410名)更に、「同性教師からの評定」・「異性教師からの評定と比較することによって、相関をみると(男自己一男から男)の相関はもっとも高く.88もあり、(女自己一女・女)は.66であるが、異性になると、.21, -.55と低くなったり逆相関にさえる。ここに評定の歪曲をみるが、どちらが〈現実像〉に近いかは更に検討を要すると報告した。藤原(東学大)は回答者の年齢によって応答が異なるのではないかと質問し、このような諸要因がどのように評定を左右するか微妙な問題の在ることを指摘した。

8つの発表は、すべて青年の自己・自己像・自己概念・アイデンティティ・自己評定というテーマの一貫

性もあって、討議も活発で且つよくかみ合っており、

稔り豊かな学会報告であった。

(西平直喜)

人 格 (325~331)

- 座長 片岡 彰・鈴木 真理子
- 325 対人場面における視線行動の実験的研究
— 言語評価と視線量が受け手の対人感情に及ぼす効果 —
広島大学 福原 省三
- 326 青年期における自我の発達に関する一考察
— 権威像に対する態度の発達の变化 —
都留文化大学 ○宗内 敦
東京学芸大学 福島 脩美
- 327 現代の「青年観」に関する一考察
東北大学 片岡 彰
- 328 青年の性役割認知
新潟大学 大浦 容子
- 329 日本人高校生への IES テストの適用
大阪府堺児童相談所 ○藤岡 新治
中京大学 岩脇 三良
- 330 Time Perspective に関する実験的研究 (1)
名古屋大学 伊藤 義美
- 331 児童の自己概念に関する研究 (1)
— 成功、失敗のフィードバックが自己概念に及ぼす影響を中心として —
東京学芸大学 鈴木 真理子

I 発表と討論の経過

福原(325)は対人場面における視線行動のもつ役割に関し eye-contact の強調機能という側面から実験的な検討を行っている。この発表に対し茨木(埼玉大)は、本研究の結果が Schwitz の結果と相違していることについて結果の解釈に際しては eye-contact 行動のもつ社会的文化的な意味の違いを考慮する必要があると指摘した。また eye-contact 行動のチェック法についても質問があり、発表者は、被験者とサクラは90度の角度で座っており意識的に顔の向きを変えねば視線は合わぬこと、Gibson らの先行研究から2m以内の距離ならば eye-contact の有無を判断することが可能なこと、さらに予備研究において観察者間の評定の一致度が極めて高かった等の点をあげ、本実験では2人の評定者が一致した時間をもって、eye-contact 行動の時間としたと回答した。さらに宮本(九州大)、福

島(東京学芸大)より、実験時にどのような教示をしたのか、また性格評定の具体例等について質問があった。最後に福原は eye-contact 研究のカウンセリング場面・教授場面・育児場面等への応用を強調した。

宗内ら(326)は、自我の発達過程を児童・青年がさまざまな権威像に対してもつ信頼と畏怖の側面から検討し、またそれが一般青年と非行青年とではどのように異なるのかを検討した。この結果年齢が増すにつれ「自己」の信頼度が増してゆくことが明らかであり、非行群は一般群に比べ「警察・裁判所・世論」に対し畏怖度が高いこと等、自我が社会的な権威との力動的な作用の結果変化し発達してゆくことを示唆した。これに対し、「自己」と「首相」あるいは「警察」等を同一レベルで比較可能かどうか質問があったが、先行研究との比較が目的の1つであったこと、また本研究がはじめ非行群について行われた為「警察・裁判所」といった項目を入れる必要があったためと回答があった。更に発表者より本研究では一対比較法を用いたため一つの項目の順位が高くなると必然的に他の項目の順位が下がるという欠点があり、それぞれの権威像についての絶対的な評価を行えるような方法を考慮中であり、現在 SD 法を用いて同様の観点から検討をすすめているとの補足があった。

片岡(327)は質問紙によって青年自身が考えている青年期の諸特徴を明らかにし、さらに因子分析により「青年らしさ」の類型化の手がかりをえようとした。この研究では高校女子および大学女子の第I因子にあらわれた項目がその評定平均も高いところからステレオ・タイプ化された青年像を表わしているのではないかと結論している。この点に関し、宮本よりステレオ・タイプ化された青年像とは何か、因子分析により「ステレオ・タイプ化された青年像」を求めようとした。その論拠は何かについて疑問が出された。これに対し発表者より、ステレオ・タイプ化された青年像とは、青年という言葉に対して即座に浮かぶ青年観である。また因子分析の結果、1つの因子に多くの項目が含まれていたため解釈が困難であったが、そこに含まれる項目の評定平均の高さからステレオ・タイプを反映していると考えたと回答があった。この他、大城(沖縄国